未解決な「戦後 70 年」：東チモールにおける環境実習に寄せて

――400 年のポルトガル統治，3 年半の日本占領，24 年のインドネシア軍事併合――

菊　池　隆之助
Ryunosuke KIKUCHI

理工学部環境ソリューション工学科　教授
Professor, Department of Environmental Solution Technology

1. はじめに

私は龍谷大学に 2010 年に赴任しましたが，それまでの 11 年間はポルトガルの Instituto Politécnico de Coimbra（コインブラ工芸大学）で教鞭をとってきました．その間，もっとも記憶に残る出来事の一つに，東チモールの独立があります（写真 1 参照）．当時，ポルトガルはインドネシアからの東チモール独立を支援し，独立後は当時の勤務校からも同僚たちが現地へと派遣されていきました．

写真 1　東チモール独立紛争時に政治犯を投獄していた独房．現在は博物館（ディリー市内）．「人権と自由」が表記されている（**2015 年 3 月**，筆者撮影）．

大航海時代に突入したポルトガルは，16 世紀にはインド洋にその勢力をのばし，1543 年には種子島に到着します[1]．この東方進出の中で，ポルトガルはインドネシア突端のチモール島にもたどり着きました（1515 年）[1]．その後，オランダと植民地争奪が起き，チモール島の東部はポルトガル領（現・東チモール），そして西部はオランダ領となりました[2]．

戦前，日本はポルトガルと合弁で東チモールに「南洋興発」を設立しました[3]．こうした貿易・経済を背景に，東チモールの首都ディリーには日本総領事館も置かれ，邦人会社による定期便も就航されていましたので，日本にとっては身近な国だったとも言えます．

私が最初に東チモール人に会ったのは，30 年くらい前でした．初めて訪れたポルトガル，その首都リスボンにあるロッシーオ駅でした．彼は駅地下の食堂で給仕をしていました．東南アジア系の顔立ちをしていたので，出身を尋ねると，彼は「東チモール」と答えました．当時，私は東チモールがどこに存在するかも知らず，マラッカ海峡あたりの一地方

だと思っていました．一方，彼は私がポルトガル語で話しかけたものだから，私をマカオ（旧ポルトガル領）から来た同じアジア圏の放浪者だと思ったようです．お互いが出身国を勘違いしながら，アジア系同士がポルトガル語で話していたことが，「リスボンっ子たち」にはどう映っていたのかと思うと，滑稽でなりません．そして今でも，彼が笑顔で接してくれたことをロッシーオ駅に行くたびに懐かしく思います．

2015 年 9 月に環境実習を東チモールで行いましたが，参加学生はわずか 7 名でした．もしかしたら，多くの日本人が，かつての私のように東チモールに関して知らなかったり，間違った見解を持ったりしているのではと思い始めました．長年暮らしたポルトガル，30 年前の出会い，そしてわが祖国「日本」との関わりを思うと，戦後 70 年になる 2015 年に，東チモールについて書いておかなければという切迫感に押され，本稿を執筆しました．

2　東チモールおける日本軍の残虐行為

第 2 次世界大戦が勃発すると，東チモールにおける日本とポルトガルの関係は悪化します；日本海軍の特殊部隊「鳳機関」が現地住民を巻き込み，駐留ポルトガル軍を襲撃し，逃亡潜伏するポルトガル人までも探し出し，徹底打撃を与えました[4]．1942 年 2 月，日本軍は東チモールに侵攻しました[3]．その理由として，東チモールはオーストラリアとの最前線という戦略的に重要な位置を占めるので，岩手県ほどの面積（1.5 万 km^2）に日本軍は 1 万もの兵力を投入しました[5]．

侵攻からの 3 年半の占領で，過酷な建設労役や貧しい食糧供給（つまり飢餓）で，現地住民は約 4 万人が犠牲になったと報告されています[3]．これは対人口比の犠牲死亡率では「第 2 次世界大戦における最大の被害」であり，人的損失の面だけを見ても日本軍占領下の他の東南アジア地域よりもはるかに酷い状況でした．しかし，「戦後史研究ではほとんど省みられることがなかった」と指摘されています[6]．また，東京裁判（極東国際軍事裁判）では「スンダ列島における残虐行為」に関して 17 件の証拠が検察側から提出されました．そのうち約半数の 9 件が東チモールにおける残虐行為に関する証拠でした[7]．約 2 年にわたる審理の後に下された判決文では次のように認定・言及されました[7]－「日本軍が領土を占領し，一般住民を日本の支配に服させるための手段として，虐殺がほしいままに行われた」．

終戦後も（つまり，1945 年 8 月のポツダム宣言後），日本軍による一般人虐殺が東チモールで行われていたことが報告されています[7]：日本軍の撤退または連合軍の攻撃を予期して，連合軍によって解放されないように……一般住民をさらに虐殺した事件が 1945 年 9 月のラクルタ（Lacluta）で発生しました．こうした日本軍による一般住民の虐殺は東京裁判議事録以外の資料でも見出すことができます．戦時中にポルトガルの東チモール総督であった Manuel de Abreu Ferreira de Carvalho は，ポルトガル本国へ提出した報告書[8]の中でポルトガル人（その他ヨーロッパ人を含む）の日本占領中の犠牲者は，1945 年 11 月 30 日までに判明しただけでも，少なくとも 73 名が虐殺されたと記載しています．虐殺された犠牲者を職業別に見ると，カトリック神父が多く含まれており，日本軍のキリスト教へ憎悪が示唆されます．

3　戦時下の慰安婦問題

日本軍占領下の問題で議論を集めてきたのが「慰安婦」です．歴史的な認識が異なるとか，仲介業者がいたとか…諸説があり，旧占領地の近隣諸国とは統一見解に至っていないことは周知の通りです．

陸軍刑法が 1942 年 2 月に改正され，強姦や強姦致死傷が処罰されることとなりました．そのため，日本軍は強姦や性病にかかるのを防ぐという名目で，将兵に性的快楽を提供するための場所として「慰安所」を設置しました．これが日本軍「慰安婦」制度の始まりと言われています[9]．

東チモールにおける日本軍の慰安婦問題の本格的調査は2000年に東京で開催された「日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷」を契機に始まったと言われています[10]．東チモールから出席したマルタ・ベレさんとエスメラルダ・ボエさん（2006年死去）の証言をまとめれば次のようなります[5, 10]：

- 日本軍の慰安所では不特定多数の兵士を相手にさせられる場合と特定の将校を相手にさせられる場合に分かれる．
- 初潮前の幼い少女も容赦されない．
- 夫が反日家と見なされ処刑された場合は，報復として，その妻に複数の日本兵の相手をさせる．
- 日本軍の命令は絶対であり，女性を慰安婦として差し出さなかった部落の長は公開処刑される．

東チモールから出席した2人の証言を読み返すと，「植民地的無意識」[11]という言葉が浮かんできます．支配する側が自分らの基準でしかものを考えず，支配される側を考慮せずに，体制を維持していく状態が続きます．そして，いつしかその状態が当たり前となり，心性を変化させるのだと思います．慰安婦問題の根底にあるのは，この「植民地的無意識」ではないでしょうか．

4　戦争責任

戦争責任は敗戦国の場合，対外的な補償や謝罪などを行ってきました．また，戦争犯罪は洗い出され，裁かれ，刑が執行されてきました．

日本軍占領下の他の東南アジア地域よりもはるかに酷い状況だったのが東チモールであることを第2章で述べました．では，日本は東チモールに対してどのような戦争責任を果たしたのでしょうか？　日本が占領したものの敗戦直後に，東チモールは再びポルトガルに返還されました[2]．従って，日本は東チモールの損害に関して，ポルトガルに賠償したかが論点となります．ポルトガルはサンフランシスコ平和条約が規定する「交戦国」と見なされず，東チモールに関する戦争賠償を受け取ることはできなかったとされています[12]：つまり，サンフランシスコ講和会議に招請されなかったことから，ポルトガルは参戦国とは認められませんでした．東チモールの特異性は，日本軍が占領した地域の中で，唯一の中立国（の領土）だったことです．そのため，サンフランシスコ平和条約第14条で規定される「日本国軍隊によって占領され，且つ，日本国によって損害を与えられた」にも関わらず，対日賠償問題において省みられることはなかったと解釈できます．いずれにせよ，東チモールに対するポルトガルの戦争被害請求権（現在の換算で約40億円[13]）については，ポルトガル側の史料を発掘した上で，ポルトガル政府内の意思決定や対応などを詳細に検証していくことが必要であり，日本戦後史や植民地戦後処理の研究の上でも，ポルトガル語の重要性がますます深まると思われます．

独立を果たした現在の東チモールにとって日本は大事な援助ドナー国であり，日本に対して謝罪も補償も要求しない方針をとっています[3, 5]．言い換えれば，日本軍による東チモール女性に対する性暴力の責任も追及されず，被害者補償も放置されたままになっているということになります．このような戦争責任のあり方でよいのか，戦後70年の日本で議論されることは残念ながらありませんでした．

5　インドネシアの武力併合

1974年ポルトガル政権が崩壊すると，東チモールは独立宣言をしました（ポルトガルなど15カ国が承認）[3, 5]．しかし独立宣言から9日後，隣国インドネシアが東チモールに武力で攻め入り，一方的に併合してしまいます[3, 5, 14]．在日・東チモール大使館のイリジオ・コエーリョ全権大使が2013年に龍谷大学を訪れた際，インドネシア併合による混乱から独立建国までの道のりに関して，深草学舎で記念講演[15]を行いました（写真2参照）．

国連はインドネシア併合を認めず，即時撤退を求める決議通達を8回も出しましたが（決議賛成国72，反対国10，棄権国43），その攻撃は止むことはありませんでした[14]．その理由の1つとして日本

写真 2　東チモール大使の龍谷大学訪問（**2013** 年 **7** 月，筆者撮影）：左上中央が学長室訪問の大使，右下が深草学舎で講演[15]する大使.

写真 3　ディリー市内の博物館（**Museu da Resistencia**）で館員からインドネシア軍事侵攻の説明を受ける当学科の実習生たち（**2015** 年 **9** 月，筆者撮影）．右下は侵攻当時の東チモールの子供たち.

やアメリカなど経済大国が，国連決議を認めなかったことがあげられます[3, 5]：(1)日本はインドネシア友好国で（石油や鉱物資源の輸入先），「援助」としてインドネシアに資金を送り続けました．この援助がインドネシアの軍事攻撃を助長している，という非難を国連議決の支持国から受けましたが，1999 年日本は「対インドネシア ODA（援助）に変更なし」と発表しました；(2)アメリカはインドネシアに対し 10 億ドルにおよぶ武器を売却しました．アメリカの武器供給は続き，2002 年インドネシアは東チモールと同じようにアチェへの攻撃を激化させていきます.

インドネシアは 24 年間にわたり軍事侵攻を続け，東チモールを外部から隔離しました（赤十字活動も拒絶）．その状況下で，約 20 万人（人口の 3 分の 1）が犠牲になったと言われています[3, 5, 16]．投獄，拷問，性奴隷など当時の弾圧を物語る品々がディリー市内の博物館（インドネシア占領時は監獄として使用）には展示されています（写真 3 参照）.

龍谷大学で行われたコエーリョ全権大使の記念講演によれば[15]，東チモールの独立を問う住民投票が，1999 年に実施され，投票率は 98.6% にのぼり，78.5% が独立を支持となりました．しかしながら，投票の結果に不満を持ったインドネシア軍は激しい

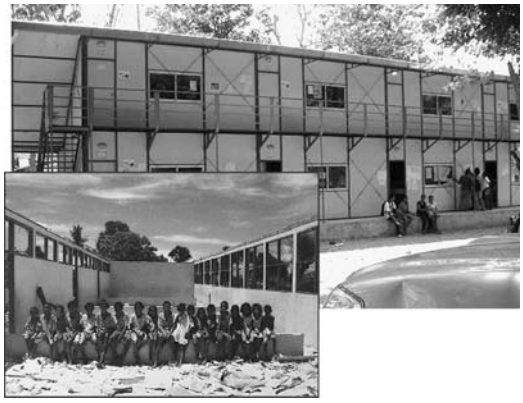

写真 4　インドネシア軍の撤退時における教育施設の破壊：龍谷大と協定のある東チモール国立大学工学部（**Hera** キャンパス）も校舎が破壊され，プレハブで教職員・学生が職務・勉学している（**2015** 年 **3** 月，筆者撮影）；左下は校舎が破壊された小学校（**1999** 年撮影，**Museu da Resistencia** 提供）.

襲撃を開始し，インフラの 7 割が破壊され（写真 4 参照），犠牲者の推定も不可能なほど被害が出て，国土は荒廃しました．同年 10 月になり，ようやくインドネシアは撤退しました．国じゅうが壊され（写真 4 参照），多くの人が行方不明のまま，2002 年「東チモール民主共和国」は独立しました.

写真 5　東チモールでの環境実習（2015 年 9 月，筆者撮影）：右上は Comoro 川での採水；左上は Tibal でのゴミ組成実習；左下は UNTL 実験室での水質分析；右下は UNTL 学生と共同での解析作業.

6　東チモールにおける環境実習

龍谷大学経済学研究科では東チモールから修士留学生（Salvador　Costa 君）を受け入れています．前述通り，東チモール大使は学長室を訪問しています．2013 年秋には東チモール国会議長 Vincente　S. Guterres 氏との面談が京都市内のホテルでありました．また，2014 年は瀬田学舎「龍谷の森」において，東チモールからの森林実習生 4 名を受け入れています．これまでの龍谷大学の東チモールとの交流は「受け入れ」に限られていました．東チモール国立大学（UNTL）と協定がある日本では数少ない大学でありながら，こちらから東チモールに行くことはありませんでした．当学科学生の環境調査スキルの向上と，調査結果の現地活用も考慮し，東チモール環境実習が立案されました．2015 年 9 月初旬，環境実習チームはバリ島経由で東チモール・ディリー国際空港に到着しました．空港出口では大学の女性スタッフが待ち受けていて，学生一人一人にスカーフ（tais）を首にかけてくれました．実習では，ゴミ組成分析，コモロ川でのサンプリング，東チモール国立大学（UNTL）・実験室を借用しての水質分析，そして現地学生と共同での解析・報告書作成を行いました（写真 5 参照）.

7　戦後 70 年と東チモール環境実習

東チモールの学生たちはテトゥン語（現地語）・ポルトガル語（教育語）であり，当学科の学生たちは日本語（関西弁？）であり，言語の障害は当然あります．しかしながら，1 つの目標に向かい，両国の若者たちが「互いに協力する姿（写真 5 参照）」には，何か感動的なものを覚えました．かつて，東チモールを統治した日本人たちは，どうしてこんな姿を思い描けなかったのだろうかと，胸が締めつけられる思いでした.

第 2 次大戦中に東チモールに駐留した日本兵の中にも，そして，国連のインドネシア撤退決議を黙殺した我が国の官僚の中にも，「国益（お国のため）」と「正義」との狭間に立たされ苦しんだ人がいたはずです．東チモールから日本への帰路の中経地点であるデンパサール（バリ島）に着いた時，学生たちに三浦襄[17]の話をしました：大戦中の日本軍によるバリ島支配は過酷なものでした．彼は民政官として，日本軍に対して訴えを持ってくる人々に謝罪し，窮状を救うための調整に奔走しました．そして，日本敗戦直後，拳銃自殺をしてしまいます（彼の葬列には 1 万人が集まったと言われています）．デンパサールにある彼の墓碑には「三浦襄はバリ島の人々のために生き，そして死んだ」と刻まれています.

8　おわりに

東チモール環境実習の計画中に，頻繁に受けた質問は「危なくないですか？　治安はどうですか？」でした－これが日本における東チモールに対する一般的なイメージだと思います．在東チモール・日本大使館が 2014 年に作成した資料によれば[18]，治安は落ち着いています；①外国人を対象とした，凶悪犯罪はなく，②テロ事件の発生もなく，③イスラム過激派の侵入も報告されていません．また，東チモールへの視察ツアーはグローバル教育コンクールで

2013 年度 JICA 理事長賞を受賞しています[19]：言い換えれば，グレードの高いグローバル教育が可能な場だとも言えます.

前勤務校であるポルトガルの Instituto Politécnico de Coimbra に奉職している間，同僚たちが東チモール復興のために派遣されて行くのを見ていて（第 1 章），複雑な気持ちでいました．ポルトガルによる 400 年間の東チモール支配はのんびりとした緩やかなものでした．一方，3 年半の日本占領は，犠牲死亡率では「第 2 次世界大戦で最大の被害」となり，一切の賠償・謝罪もしませんでした（第 2 章）．ポルトガルは国連のインドネシア即時撤退決議を支援しましたが，日本は撤退決議を黙殺しました（第 5 章）．東チモール環境実習を終えた 1 ヶ月半後，私は東京で東チモールの言語事情に関する発表を行いました[20]．その時，「東チモールのために何かしたい」と相談してきたのは，京都在住のポルトガル人講師 1 名だけでした．そこに，「戦後 70 年の現実」を垣間見たような気がしました.

参考文献

［1］ As Viagens dos Descobrimentos, 2010. Revista Nova Escola, 118.

［2］ T. J. Gelman, 2003. Indonesia : Peoples and Histories, Yale University Press.

［3］ 高橋奈緒子，益田賢＆東ティモール；奪われた独立と自由への戦い，明石書店.

［4］ 平松鶩司（編纂），1987．郷土部隊奮戦史，大分合同新聞社.

［5］ 山田満（編纂），2010．東ティモールを知るために，明石書店.

［6］ J. Dunn, 2003. East Timor : a rough passage to independence, Longue Ville Books.

［7］ 松元直歳（編纂），1968．極東国際軍事裁判速記録第 10 巻，雄松堂書店（記載は 772-773 ページ）.

［8］ Manuel de Abreu Ferreira de Carvalho, 1947. Relatório dos acontecimentos de Timor, Imprensa Nacional（記載は 733-736 ページ）.

［9］ 歴史教育者協議会，2006．日本の戦争ハンドブック，青木書店.

［10］ VAWW-NET Japan（編集），2000．女性国際戦犯法廷の全記録，緑風出版.

［11］ 中川成美，2015．忘れられた記憶－戦争の文学再読，京都新聞，No.48006（10 月 15 日），p 7.

［12］ G. C. Gunn, 1999. Timor LoroSae : 500 years, Livros do Oriente.

［13］ Embassy of Portugal, 1951. Memorandum FO 371/92562 1951 reel 6 YD-127, London.

［14］ 松野明久，2002．東チィモール独立史（アジア太平洋研究選書 3），早稲田大学出版部.

［15］ I. Coelho, 2013. Post Conflict Countries – Reconstruction and State Building，龍谷大学・深草学舎（7 月 4 日）.

［16］ Secretariado Tecnico Pos-CAVR, 2011. The Report of Commission for Reception, Truth and Reconciliation in Timor-Leste, Dili.

［17］ 長洋弘，2011．ババ・バリ　三浦襄，社会評論社.

［18］ 在東チモール日本大使館，2014．東チィモール案内，Dili.

［19］ 国際協力事業団（JICA），2014．国際協力レポーター報告書.

［20］ K. Aoki and Kikuchi, R., 2015. Difusão da língua portuguesa na comunidade lusófona – caso de estudo de Timor-Leste. Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasileiros, 10–11 October, Tokyo.